

## ダビデを愛しておられる神

年間第11主日C年

創造された世界は光と影の組み合わせからなっている、と表現するなら、光とは神の働きの結果であり、影とは人間の罪の結果と言えるでしょう。今日の第一朗読は、その典型的な例と言えましょう。その朗読の前提となっている光は、ダビデの一生涯に映し出される神の愛です。永遠の存在である方、唯一の真なる主、イスラエルの神は、ダビデを愛しています。それにダビデという名前の原語は、ヘブライ語の「ドデイ」に由来し、つまり、愛された、「私の愛する者」の意味であると考えられています。それは新約聖書からも照らされます。ヨハネ福音書の弟子の名前は、「イエスの愛しておられた者」（ヨハ13・23）と言われます。やはり、ダビデも、神の愛しておられた者と言われます。ダビデの生涯は、神からの賜物が収められている宝箱のようなものでした。イスラエルの軍隊が、ペリシテ人のゴリアトという戦士の前に恐れおののいていたところ、ダビデはただ小石と石投げひもだけを使って、ゴリアト打ち殺します。この勝利のために使われた「武器」が何であったかを考えるなら、ダビデに人間以上の力が働いていたことが理解できます。その後、神の命令に不従順であったサウルはイスラエルの王座を追われ、代わりにダビデが選ばれます。神はダビデのすべての敵を退けて王座を揺るぎないものにし、人間の歴史を超え、永遠に残ることを約束されます（サム下7・14）。ダビデを愛しておられた神は、それほどの賜物を与えられました。

そうした背景のもとに、今日の第一朗読はダビデの罪について語ります。その中に明らかに姦通と暗殺の罪があります。ダビデの良心の薄暗いところに何があったのでしょうか。神しかご存じありません。ダビデはたとえわずかでも、自分が犯したひどい行為を、イスラエルの王だからゆるされると考えたのでしょうか。その問いへの答えは、底のない海と言える深い霧に包まれている人間の良心です。疑いないことは、すべての大罪にとまなう神に対する軽蔑が、創造された世界で最初に犯された傲慢の罪と何らかの形でつながっているということです。その罪を犯した者は、主イエスから「最初から殺人者である」と言われています（ヨハ8・44）。いずれにしても、神がダビデにお与えになった賜物を考えると、彼の不忠実と恩知らずが浮き彫りになります。なぜ聖書は、それほどに神のみ業と人間の罪とのコントラストを強調するのでしょうか。それがわかれば、罪びととしてダビデをとがめようとする人はだれもが口をつぐむでしょう。

ある霊的に深い聖書学者が、興味深いことを指摘してくれました。つまり、ダビデの罪を伝えるサムエル記は、創世記が書かれる前にできていたと言うのです。つまり創世記の作者はそれを書く前に、サムエル記を読んだと考えられます。そして、ダビデの罪をすべての人間にあてはめようとして、アダムとエバのエピソードを作り出したということです。要するに、ダビデのエピソードとアダムとエバのエピソードが、互いに照らされるのは確かです。ダビデの場合にも、アダムとエバの場合にも、腐敗を生み出した種は同じです。

そこから、全歴史のすべての放蕩息子と放蕩娘が生じるのです。しかし、創世記の一つの根本的な教えは、神が人間の罪に負けることなく、人間を創造された愛によって、救いの歴史、イエス・キリストへ導く救いの歴史を始められたということです。その教えは、ダビデのエピソードにおいても示されます。つまり、ダビデは、神が愛しておられる者ですが、罪を犯したからと言って、神から愛されないということではありません。神は、異なる形でダビデを愛し続けられるのです。それについて少し考えてみましょう。

ナタンという預言者は、神から遣わされて、罪を犯したダビデに向かって、「主の言葉を侮り、主の意に背くことを犯しました」と指摘します。その言葉はダビデの心を貫き、神の新しい創造をもたらします。空を駆ける稲妻に打たれたかのように、自分自身と神との新しい認識を与えられ、変貌させられます。ダビデは、単純な言葉で、新しい、深い閃きを言い表します。「私は主に罪を犯しました」と。神のダビデに対する愛、ダビデの心に注がれた知恵は、痛悔の形で現れます。憐れみ深い神に対するダビデの信頼は深まり、清い心を与えてくださるよう願うダビデに答えて、神は雪より白い心を与え、賛美のいけにえをささげる心に変えられます。神のゆるしによって、罪びとダビデを救いの計画に協力する伴侶<sup>とも</sup>に変えられます。彼の上に計画されていた課題は、新たに肯定されます。大天使ガブリエルはそれをナザレのマリアに伝えます。「神である主は、メシアに、父ダビデの王座をくださり、その支配は終わることがない」と（ルカ 1・32-33 参照）。

そこで聖書は何を教えてくれるのでしょうか。神は罪びとダビデになさったように、すべての罪びとになさるといことです。神のご計画は、ご自分がお与えになるゆるしによって新しい創造を行われます。自ら神の敵となった人が、神のゆるしによって、神の友に変えられ、全世界の救いの業を行うために神の協力者となります。今日の他の朗読は、それを豊かに示してくれます。パウロはユダヤ人として神に熱心に仕えていました。そのために全力を尽くしてイエスの弟子たちを迫害したのです。しかし、神のゆるしによって、キリストの証人、宣教者に変えられます。次の言葉は、主の恵みによって新しくされたパウロの心を完ぺきに表現しています。「私はキリストと共に十字架に付けられています。生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。私が今、肉において生きるのは、私を愛し、私のために身をささげられた神の子に対する信仰によるものです」（ガラ 2・19-20）。さらにルカ福音に登場する罪深い女、マグダラのマリアは神のゆるしによって新しくされ、使徒たちにキリストの復活を伝える弟子としての心がつくられたのです。これが神のなさり方です。天地創造において神は無から被造物をつくられました。第二の創造においては、人間の腐敗した心を神の聖性を生きる心に、神に敵対する心のみ業に協力する心に、悪臭を放つ心を神の香りを放つ心に、つくり変えられるのです。これこそ、私たち一人ひとりのための神のご計画であり、神のみ旨です。

J. E. Perez Valera S. J.